



## 本場を味わう

～地方の小さな農業が魅力的に続いていくための提案～

## この土地でしかできない生業

現在、市場に出回る干し柿の比率としては、「機械乾燥」が圧倒的に多く、「自然乾燥」を行うブランド品は非常に少ない。

この先、工場生産により低価格が実現された商品が出回り続けると、

昔ながらの製法にこだわり、守り続けてきた畑地区の干し柿の生産が衰退しかねない。

畑地区の干し柿生産の魅力は味だけではなく、生産されている場所、生産している人々など現地に隠されているのではないかと考える。

## 食を生み出す場所＝本場

現地での農業体験を通して、

実際に生産されている風景を見てから食べる干し柿は何倍もおいしく感じた。

自然と共に行う畑地区の生産は生産風景という大きな武器をもっているのだ。

この畑地区にしかできない本場を味わう建築提案を行っていく。

## 「当たり前」の風景であるために

日本の国果である柿を身近に触れ、集落の生産風景に愛着を感じる。

来訪者はここで自然と共に生産を行う人々の当たり前の日常を体験し、

コミュニケーションをとることで、この集落の人々の生産に対する想いに触れる。

まだまだ新しい可能性を秘めたこの集落の干し柿生産は、

ここに今まで訪れなかった人々の力によって、守られていく。

# 1 敷地：飴色の宝石を生み出す集落



## 干し柿づくりの歴史

畑集落の干し柿づくりの歴史は古く、実際に樹齢400～500年に達する老樹が現存していることから、約400年前から干し柿づくりは行われてきていたと考えられる。集落を山々に囲まれた盆地の地形が海からの湿った空気を入りにくくさせ、霜が降りにくいといった自然条件を揃えたため、この土地で干し柿づくりが発展していった。干し柿づくりのための「柿小屋」が多数点在し、柿小屋と約5000本の柿の木畑が調和して、独自の美しい景観を生み出している。



## 柿小屋について

畑集落での干し柿生産が他の干し柿を作っている地域と大きく違うのは、干し柿を作るために使用される常設の専用の「柿小屋」があることである。柿小屋の特徴は木造で3～4階の高層小屋で、2階以上が総ガラス張りであることである。各家庭で基本的な作りは似ているが、中にはより通風をよくするために床が吹き抜けになっているものや、生産効率を上げるために二段干しになっているものなど、各家庭が使いやすいように独自の工夫を凝らしており、柿小屋によって雰囲気が違うのも特徴である。



## 2 本場で見た生産地の姿



11月：紅葉する柿の木



3月：土づくり



10月：柿収穫



3月：接ぎ木作業



小屋いっぱい吊るされた柿



特徴的な柿小屋内部



石州瓦の民家



2月：剪定作業



1月：生産者会議



傾斜の多い地形



11月：下処理



使われなくなった柿小屋



9月：青々とした柿の木



12月：温度管理



6月：青柿収穫



全面ガラス張りの柿小屋



仲間と談笑



11月：収穫された柿



12月：出荷作業



講習会



5月：受粉作業

### 3 調査・分析：集落に存在する2つの境界

1つめの境界は生産者にとってのものである。生産者は目に見える境界線がなくとも感覚的に敷地境界線を認識している。生産者にとっての敷地境界線は自分たちの作業範囲であり、他の畑はまたがないように作業しよう。というのが共通の認識である。作業を終えるとそれぞれの小屋へと帰っていく。

2つめの境界は観光客にとっての境界である。畑と柿小屋が離れていることや、各家の敷地に入り込まないと柿小屋の内部までを見ることが出来ないため、断片的な作業風景だけを見ることになる。敷地が広いので、たまたま訪れた観光客と住民が出会う機会はめったに訪れない。観光客と住民には大きな境界が存在する。

敷地境界線



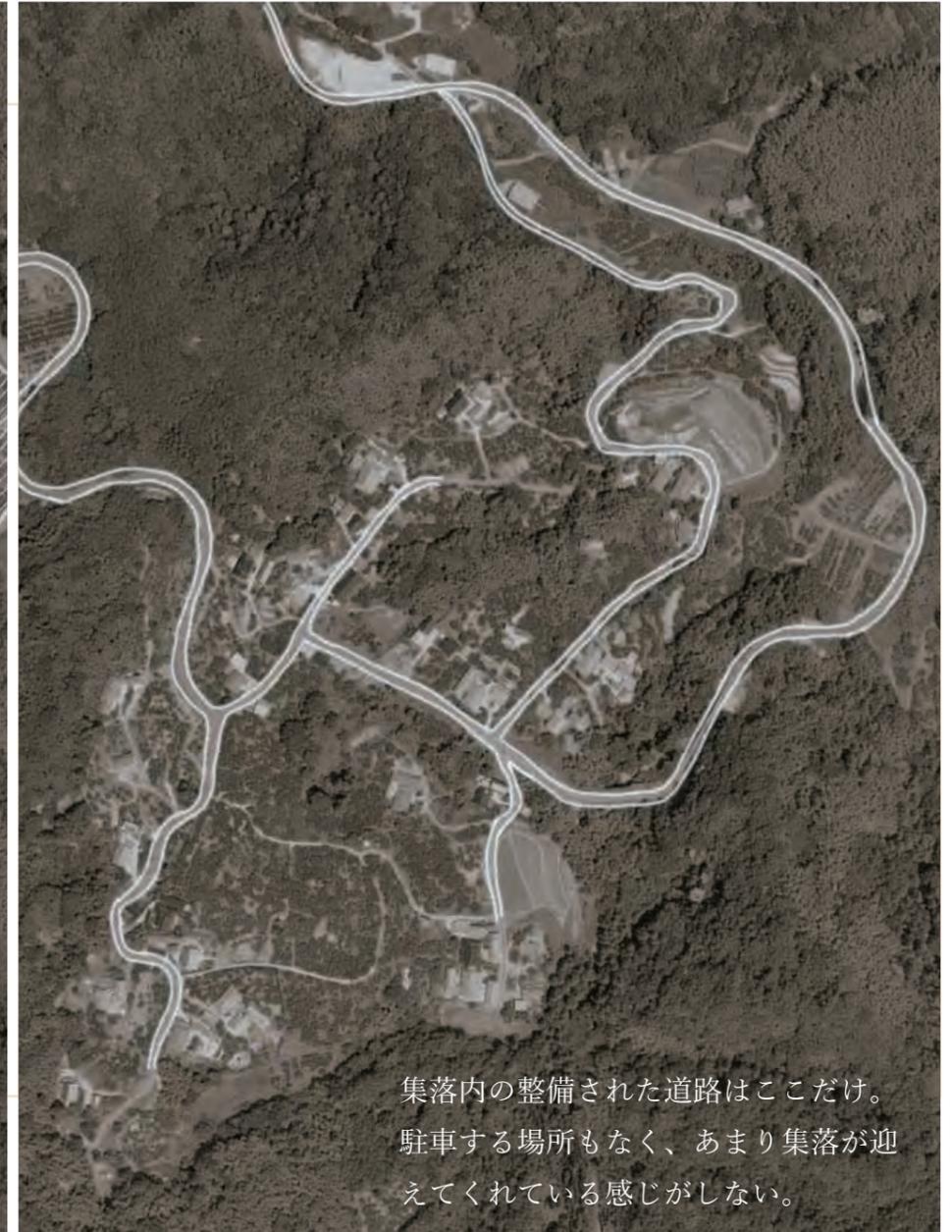
他人の畑＝生産が実る場所。  
下手に跨ぐことができない。

敷地いっぱい広がる柿畑



集落全体に広がる柿畑は生産  
が行われている柿畑内部と柿  
小屋との距離を広げる。

訪問者が通るルート



集落内の整備された道路はここだけ。  
駐車する場所もなく、あまり集落が迎  
えてくれている感じがしない。

生産者が意識しすぎている境界

来訪者が集落と間に感じてしまっている境界

## 4 調査・分析：干し柿の生産と敷地の特徴

生産者が自然環境をよく読み取りながら、丁寧に生産を行ってきたことで「まる畑干し柿」は生産できている。そんな干し柿生産が相手にしている「自然環境」はこの集落の一番の魅力であるとする。本計画では手間のかかっている伝統産業と、それらを取り巻く自然環境を集落外の人々にも建築を通して実感してもらい、生産の奥深さを伝えていく。

1月	出荷作業
2月	剪定作業
4月	土作り
5月	受粉・摘蕾作業
7月	青柿収穫（摘果）
10月	柿収穫開始
11月	干し柿作り開始 等級分け・皮むき・下準備・自然乾燥（約1ヶ月）
12月	出荷前検査 出荷準備（箱詰め・検査）
毎月	生産者会議 草刈り



# 6 設計：集落を繋いでいく「道」の計画

柿畑の所有地の境界線をまたがるように「みち」を計画する。生産を取り巻く自然環境や人の動きが感じられる作業を抽出し、引用する。「みち」によって人と場所が繋がり、人と人が繋がる。繋がりを続ける建築提案により、生産のための場と化していたこの集落に新たな空間を生み出す。

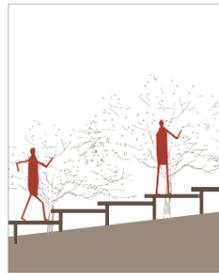
## 道を計画する目的



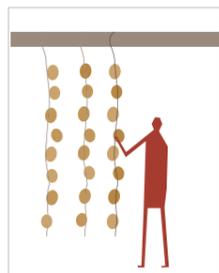
活発な意見交換



観光の誘導



作業の補助



本場を味わう

## 道を使う生産者と道を通る観光客

### 道の使い方

### 自然環境

### 道の使われ方

青柿収集所

緩い風が吹く傾斜地

柿渋染め体験施設

柿収穫

緩やかな傾斜地

歩道

足場

急な傾斜地

展望台

空き家活用

使われなくなった柿小屋

食事処

農作業小屋

私有道路

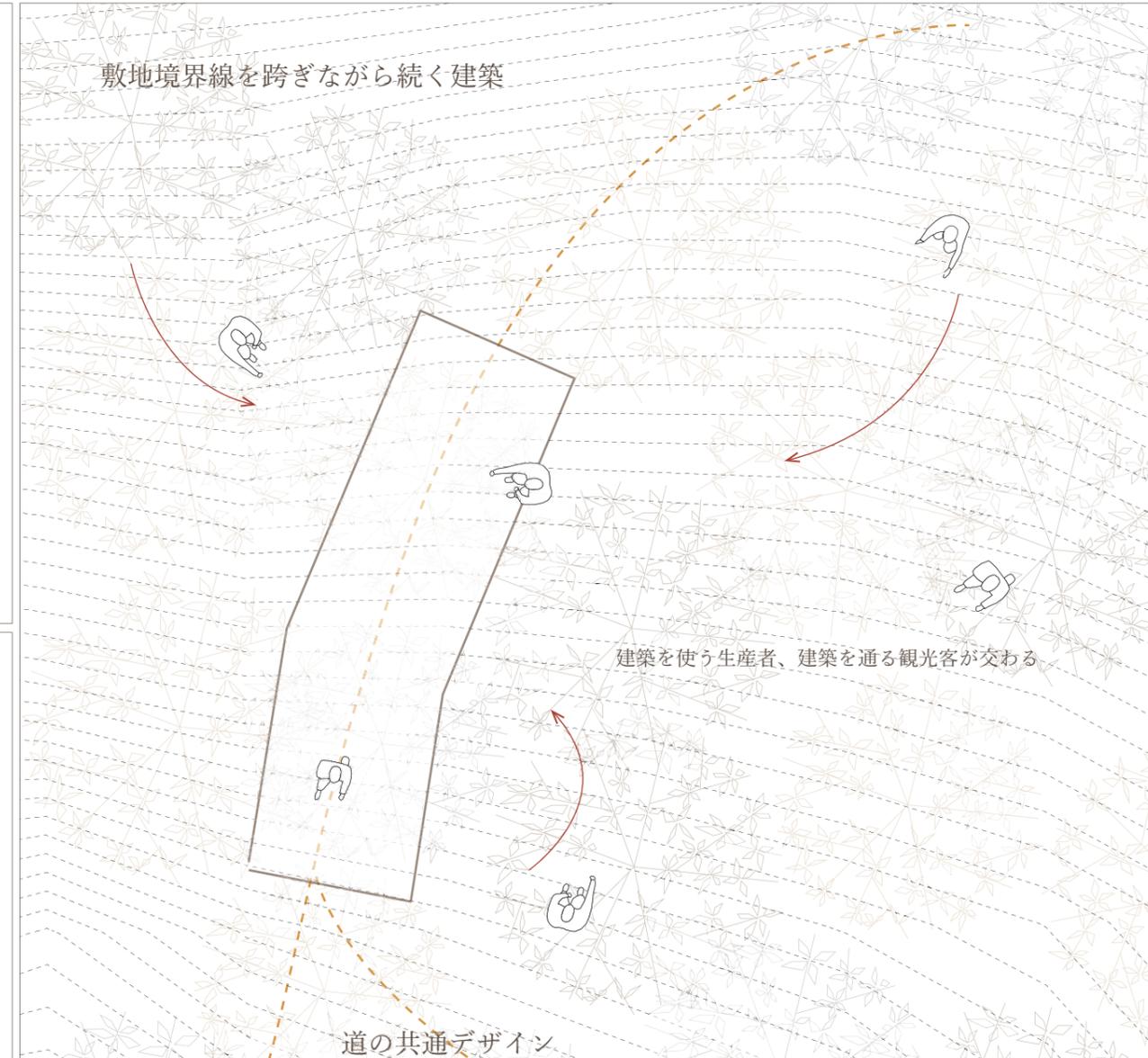
売店

集会所

空き地になった柿畑

観光案内所

## 敷地境界線を跨ぎながら続く建築



建築を使う生産者、建築を通る観光客が交わる

## 道の共通デザイン



梁の上を荷物置き場にする

低めの天井

高窓

ガラス張り

柿を吊るすための丸太

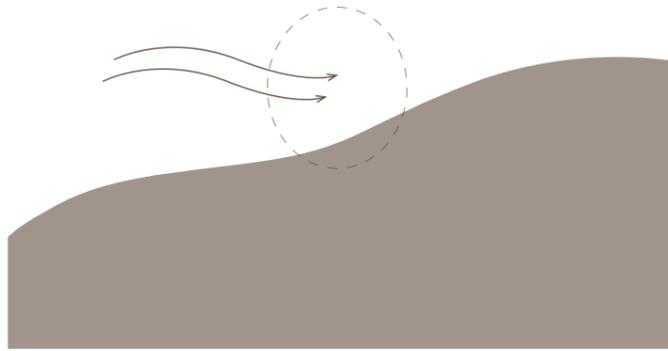
各家庭の柿小屋に見られる軸組みの特徴は様々。今回はその各家庭の小屋の特徴をモチーフに建物のデザインを決め、集落になじませる。

# 設計 風のみち

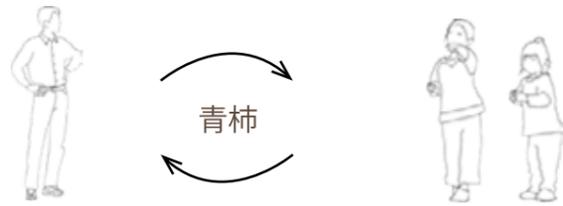
生産者が育てた柿の木が青々と繁茂する木陰の中、生産者と観光客が体験を通して繋がるみちの提案。  
青柿収穫を行う生産者は観光客がみちを通っているのを見て、青柿収穫のお手伝いを頼む。  
観光客は収穫した青柿で柿渋染めを体験し、渋柿は干し柿以外にも使い方があることに触れ、記憶に残る思い出を作る。



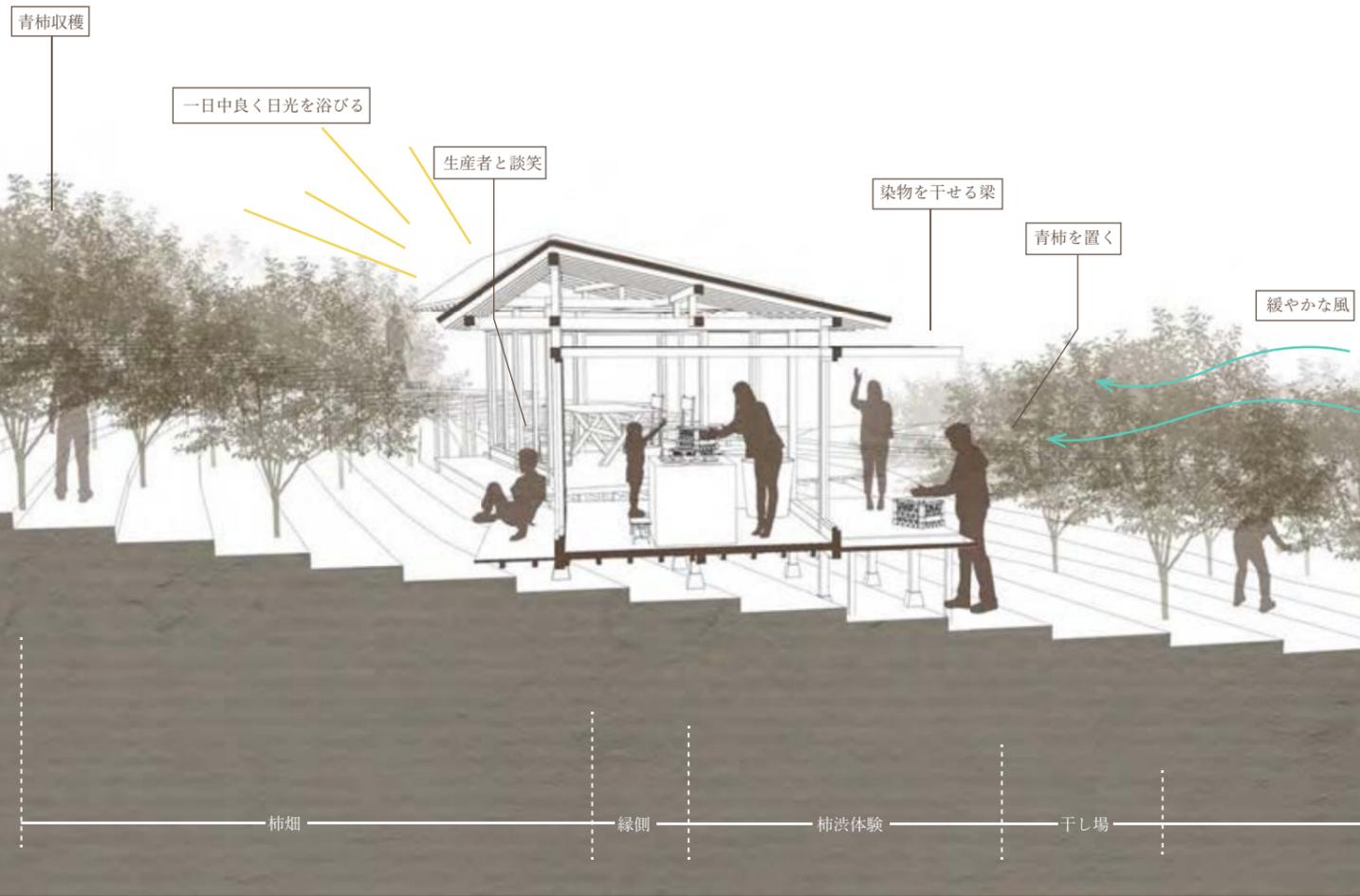
一敷地一  
緩やかな風が吹く山の中腹



青柿収穫所 × 柿渋体験施設



生産者は道を収穫した青柿を集める場所として使い、観光客は生産者が集めてきた青柿を使って柿渋を作り、柿渋染めを体験する。

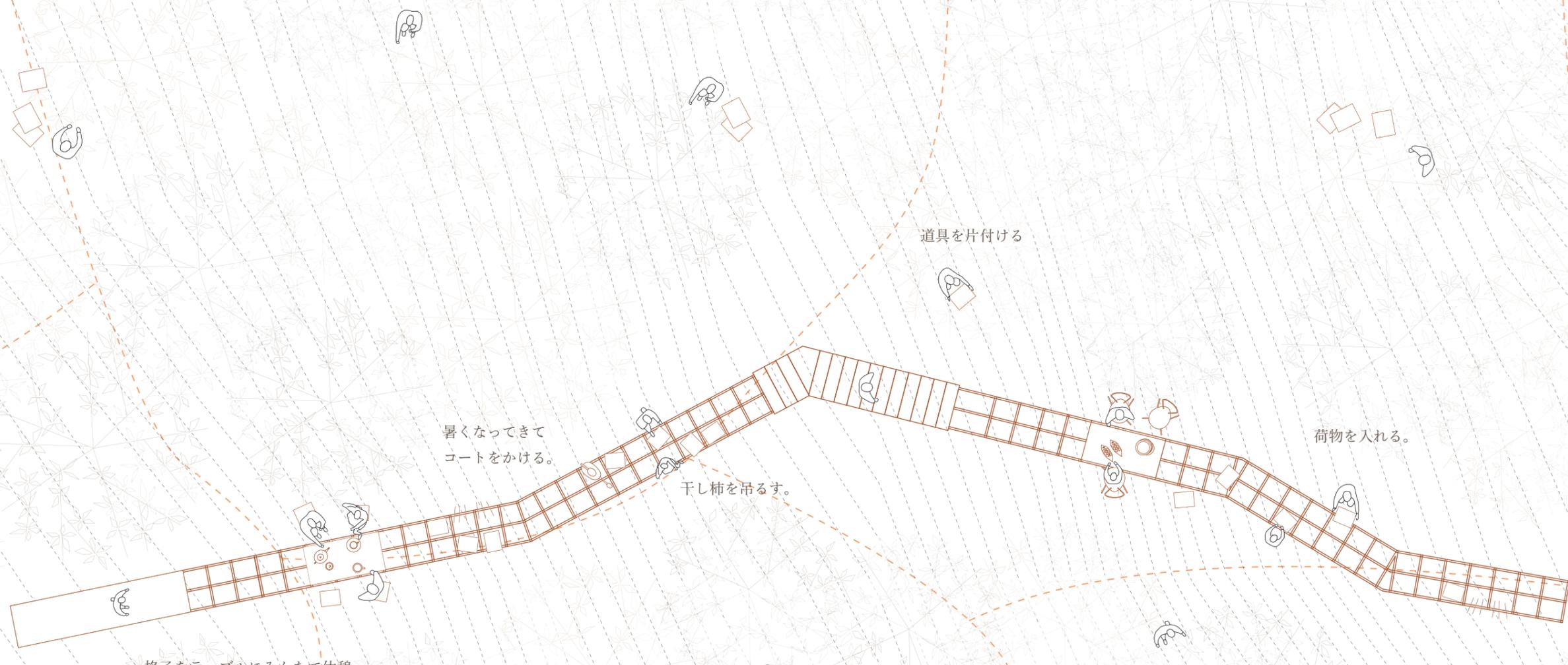


# 設計 つかいみち

全長60メートルにも及ぶ長い道を設ける。

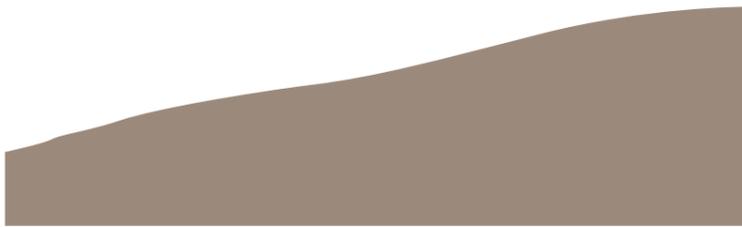
高低差を付け、格子で組まれた道の上では観光客が収穫を行う生産者の目線の高さを楽しめます。

道の下では作業者がお昼休憩したり、収穫した柿をみちで保存する。

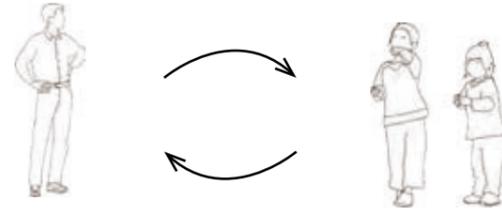


—敷地—  
集落内のほとんどの敷地に存在する緩やかな傾斜地

約 10°

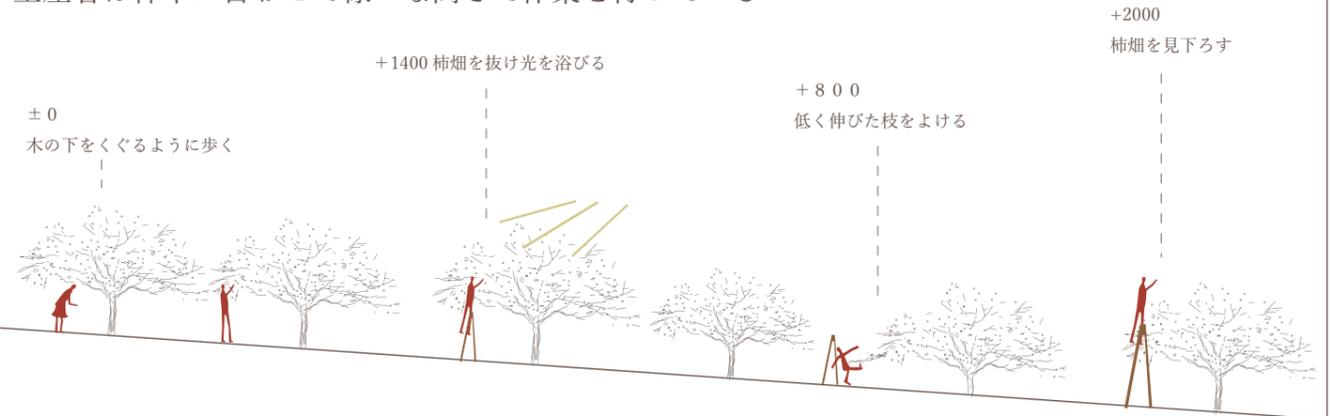


—機能—  
休憩所 × 歩道



生産者は格子で組まれたみちを道具入れや、休憩所として活用し、観光客は歩きながら生産者の作業気分を味わう。

—収穫の様子—  
生産者は柿木に合わせて様々な高さで作業を行っている



# 設計 交わるみち

家から畑へ向かう私有道路の途中に主要道路と交わる様に設けられた交差のみち。

生産者は畑に出入りする際に必ずこの道に立ち寄り、荷積み・荷下ろしを行うため、通年で畑作業を行っている生産者の生活の匂いがする。

規格外の柿は、売店で下ろす。本場の西条柿を珍しく思った観光客が続々と立ち寄ってくる。



至母屋

私有道路

主要道路

農作業小屋

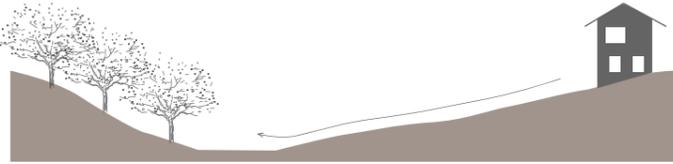
売店

他の人の畑

家主の畑

0 1000 2000 1/100

—敷地—  
母屋と柿畑が離れている人の生活道路



農作業小屋 × 売店



生産者は作業の準備や農機具の手入れなどを行い、観光客は売られている渋柿を生産者に目利きしてもらって購入出来る。



生産者が畑に行くために農作業小屋へ寄る



観光客が柿を買うついでに帰宅途中の生産者と談笑する

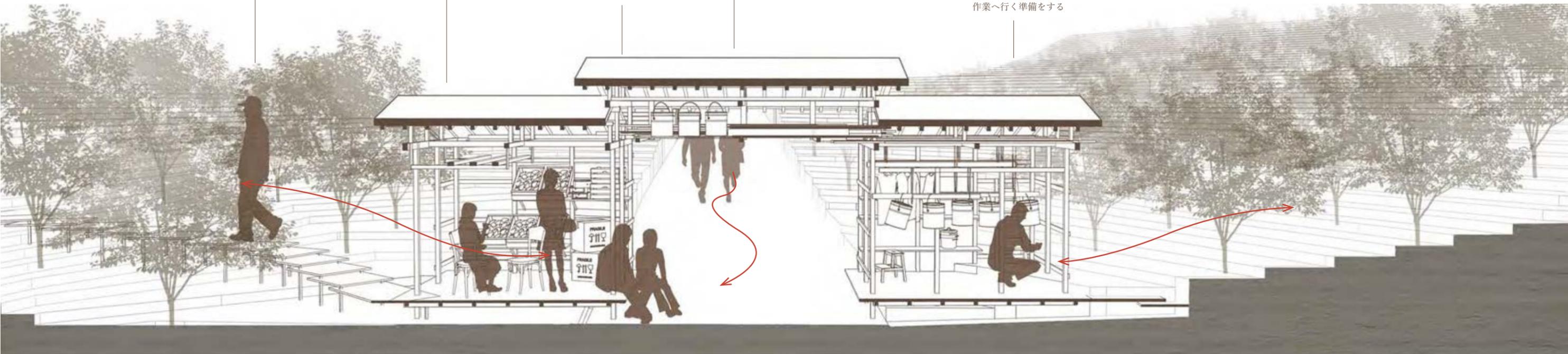
畑作業についていく

本場の柿の大きさに感動する

納品ついでおしゃべり

人の群がりになり、駆け寄ってくる

作業へ行く準備をする

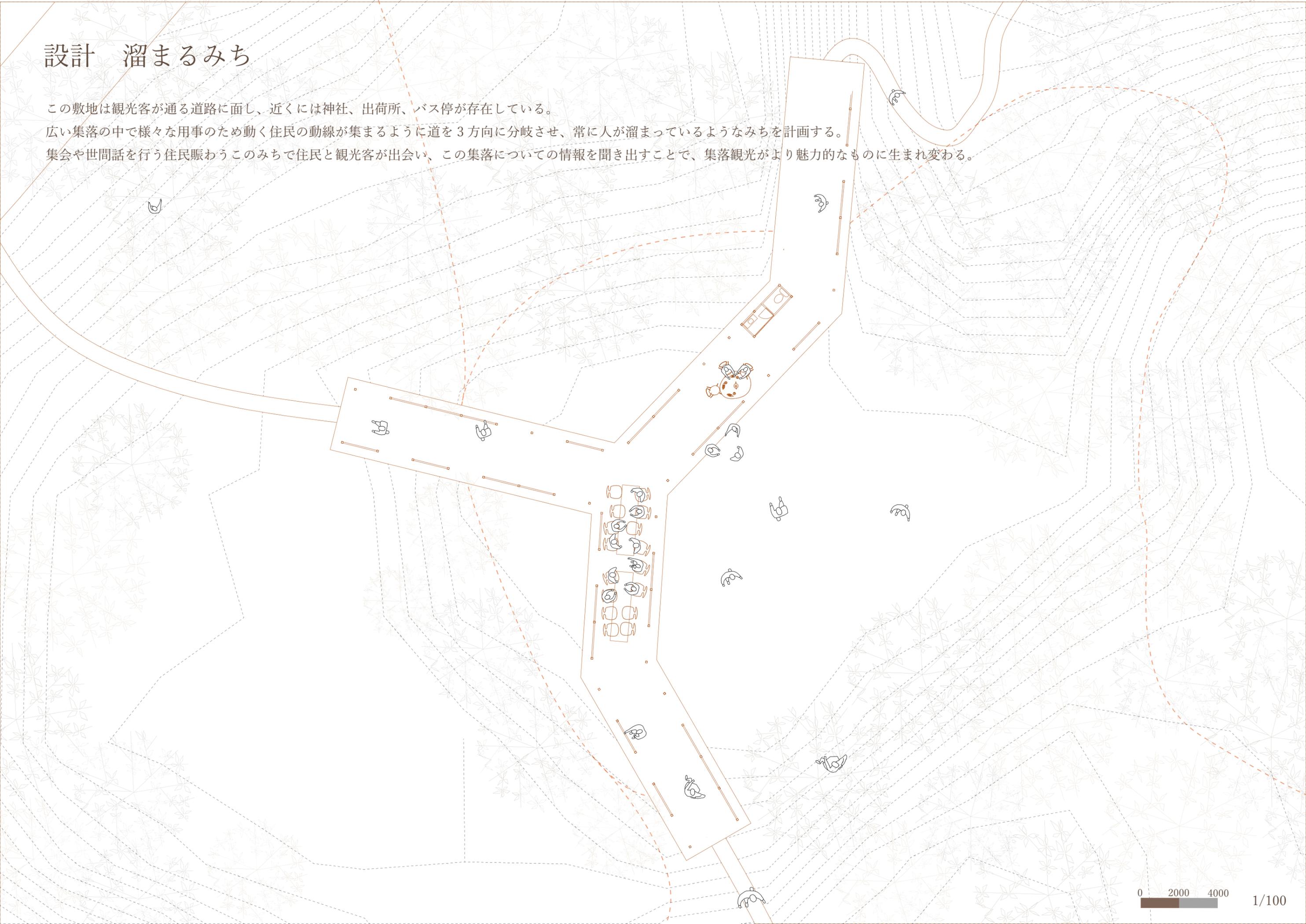


# 設計 溜まるみち

この敷地は観光客が通る道路に面し、近くには神社、出荷所、バス停が存在している。

広い集落の中で様々な用事のため動く住民の動線が集まるように道を3方向に分岐させ、常に人が溜まっているようなみちを計画する。

集会や世間話を行う住民賑わうこのみちで住民と観光客が出会い、この集落についての情報を聞き出すことで、集落観光がより魅力的なものに生まれ変わる。



一敷地

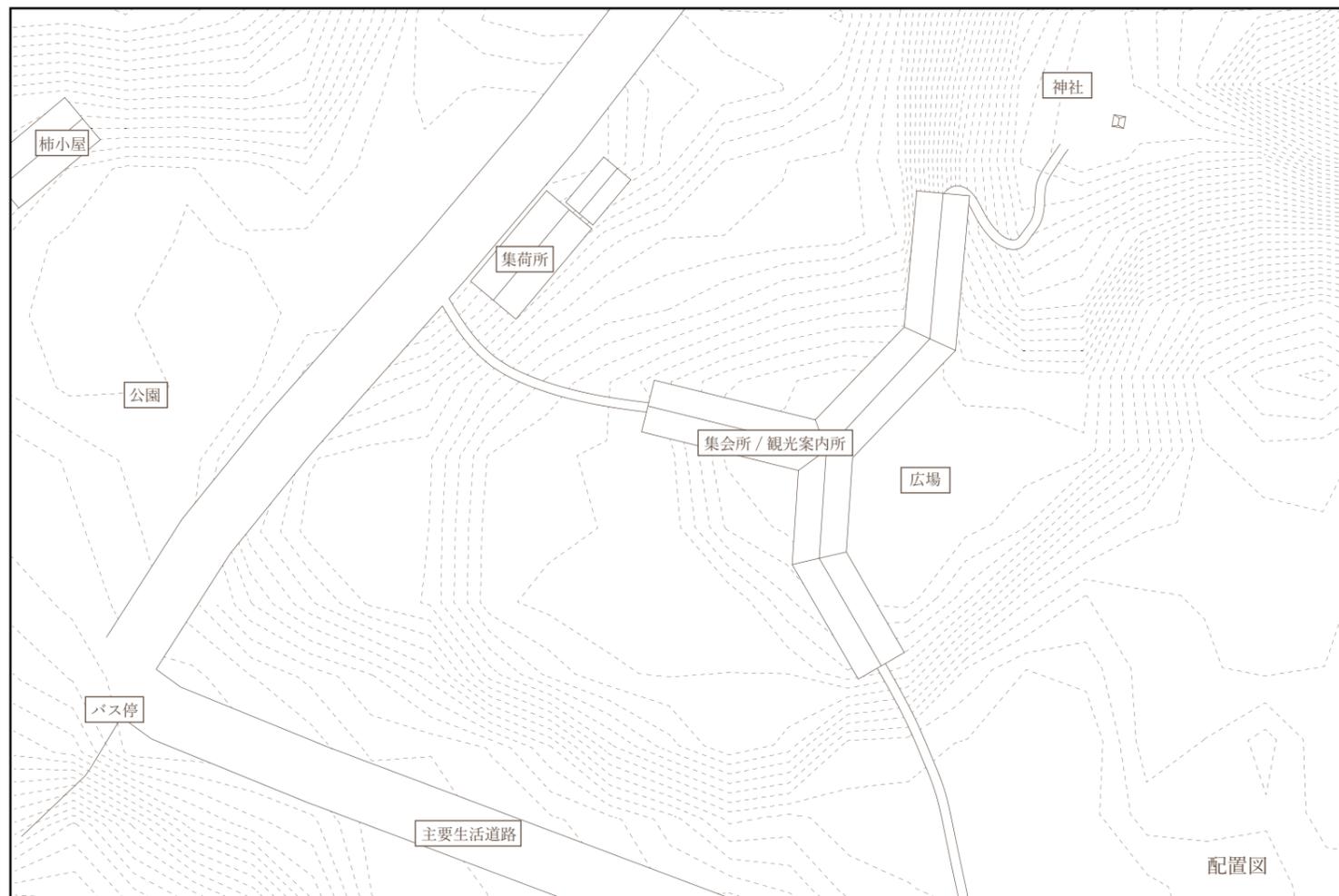
土地の所有者が生産を引退し、空き地になった平地



集会所 × 観光案内所



生産者は道に集まって集会を開いたり、様々なイベントを行ったりする。観光客は道に集まる住民に集落の情報を聞き、観光に役立つ。

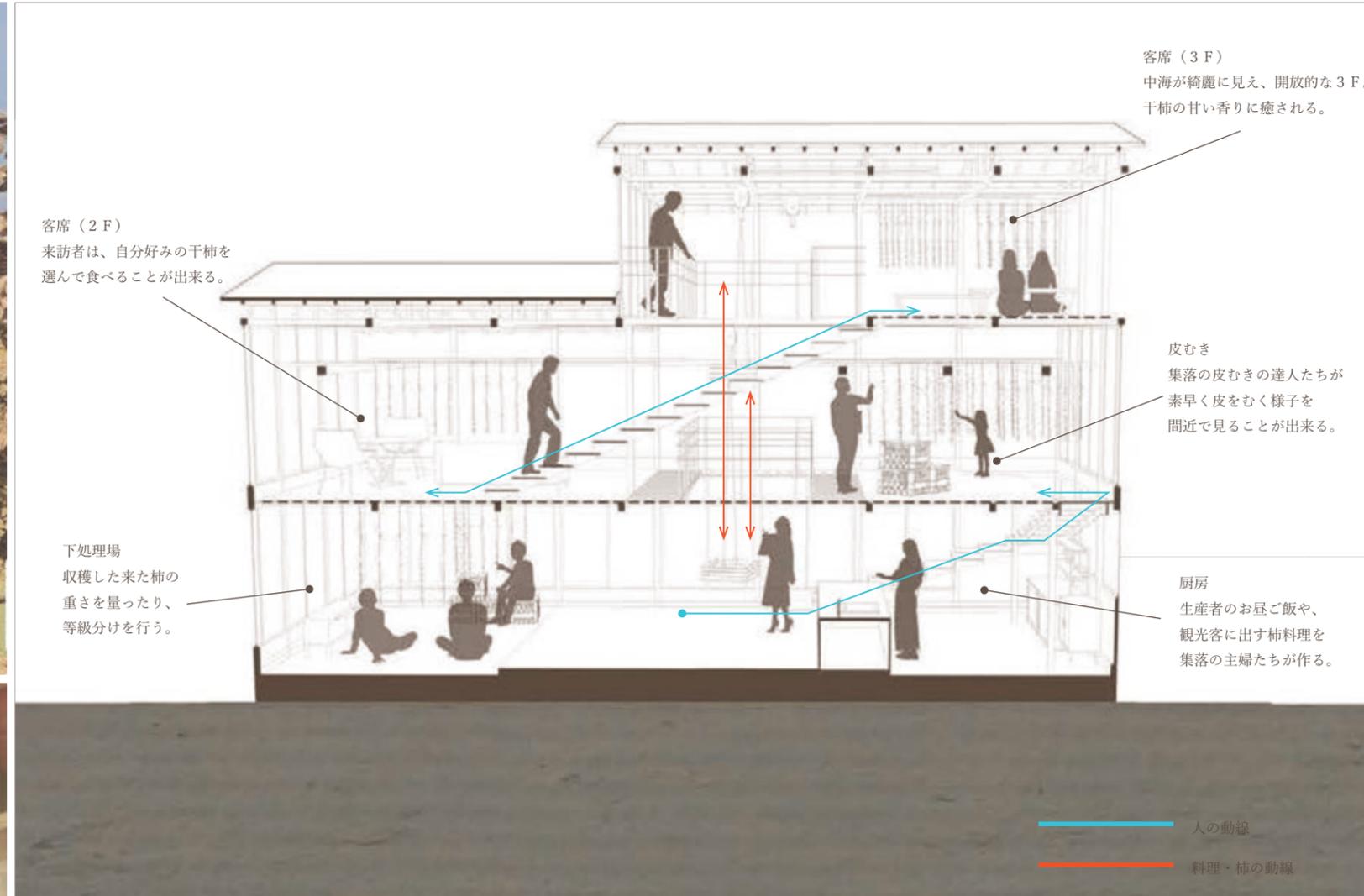
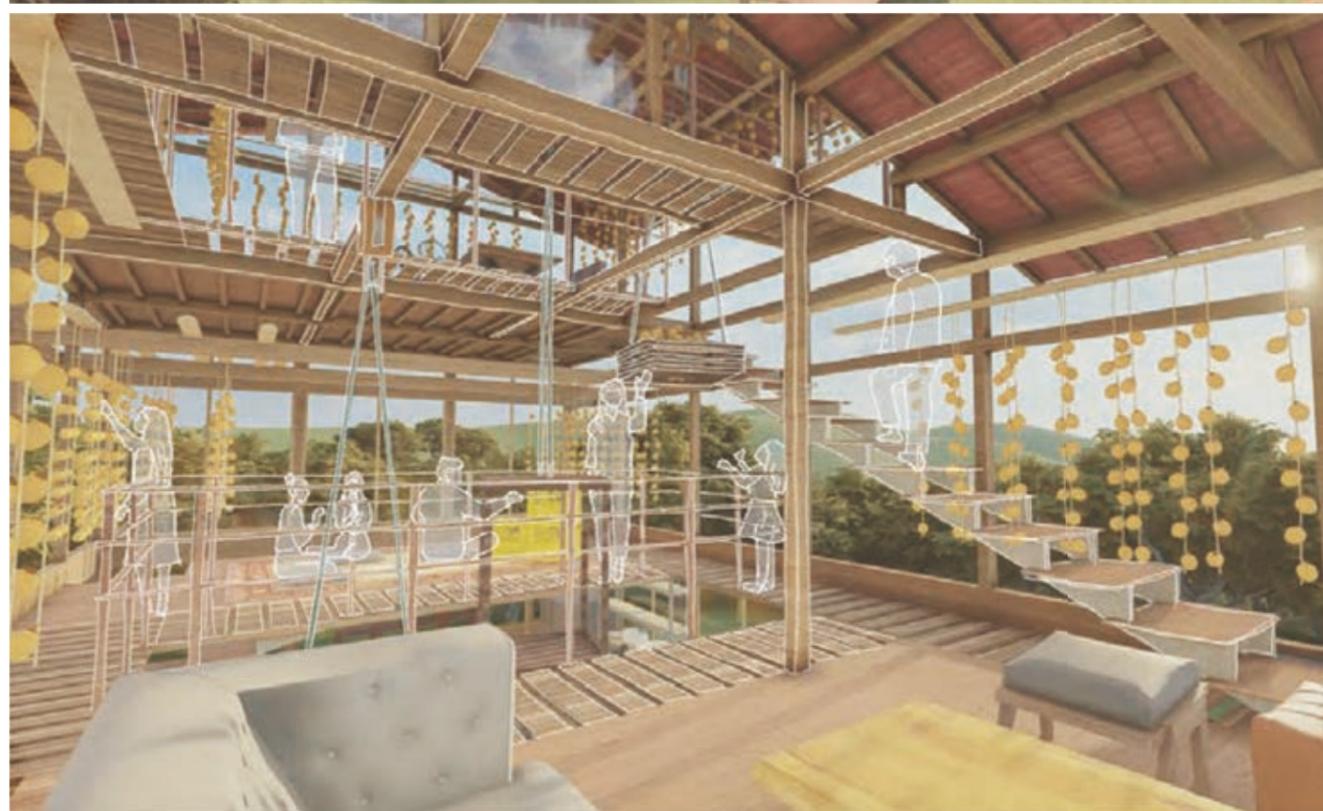


# 設計 みせるみち

このままだと古びていきそうな小屋を駆け上がるように通されたらせん状のみち。

生産者はこの空き小屋を、生産の一番の見せ場である渋柿から干し柿へと加工する工程を観光客に見せる場所として活用する。

本場で加工しているところを見学し、本場の味を知った観光客は畑集落に魅せられる。

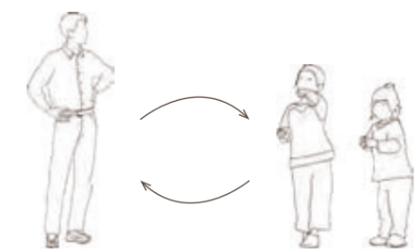


一敷地一

後継者不在のため、干し柿づくりを引退し  
使われなくなった空き小屋

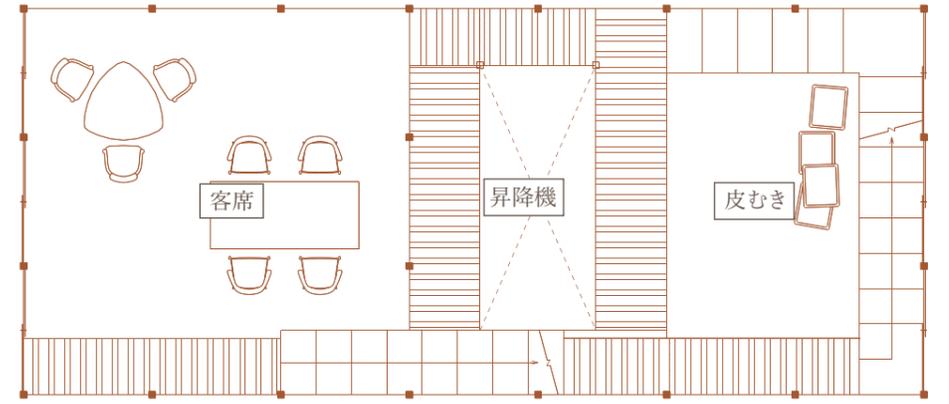
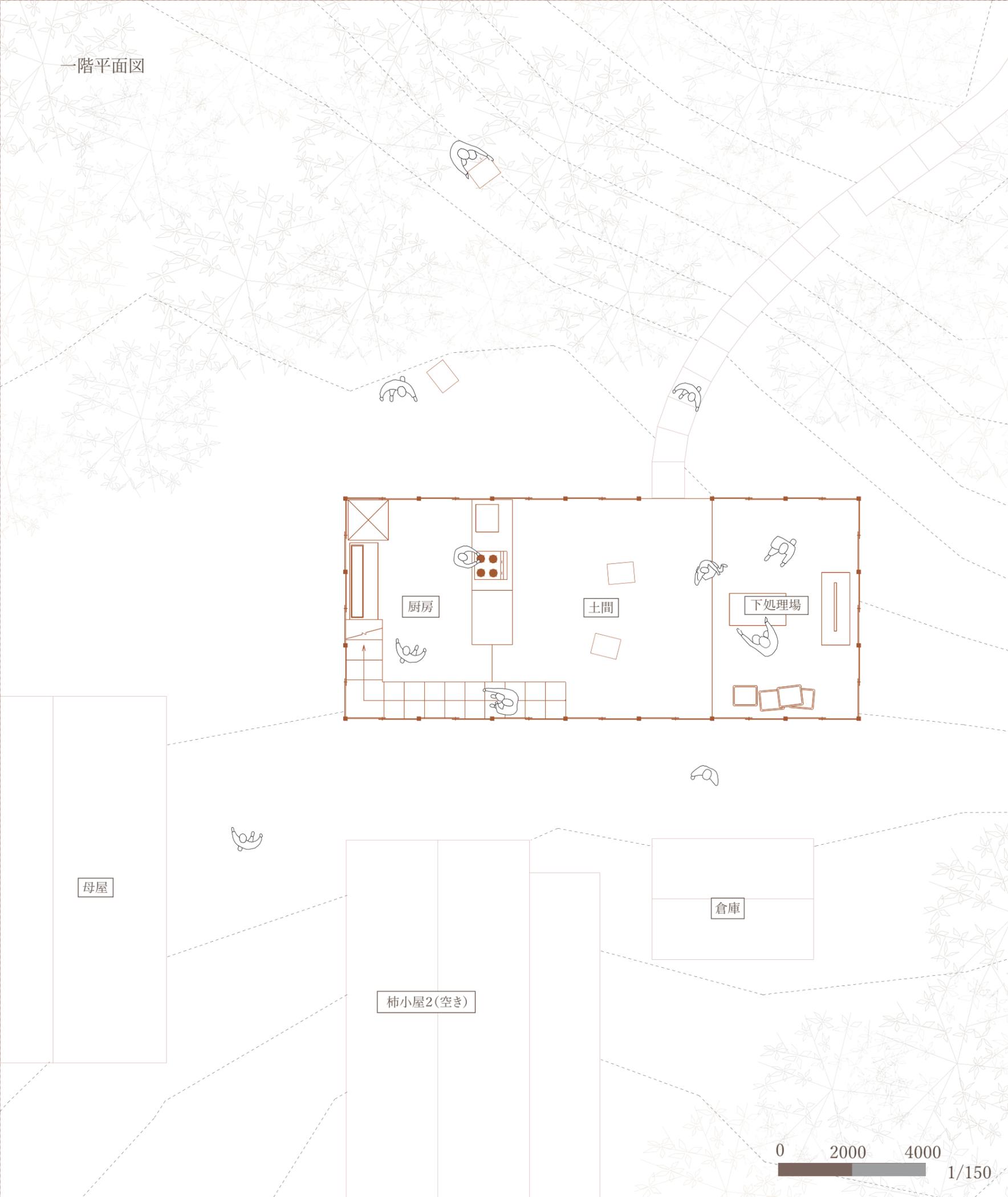


閑散期の柿小屋活用 × 本場が味わえるカフェ

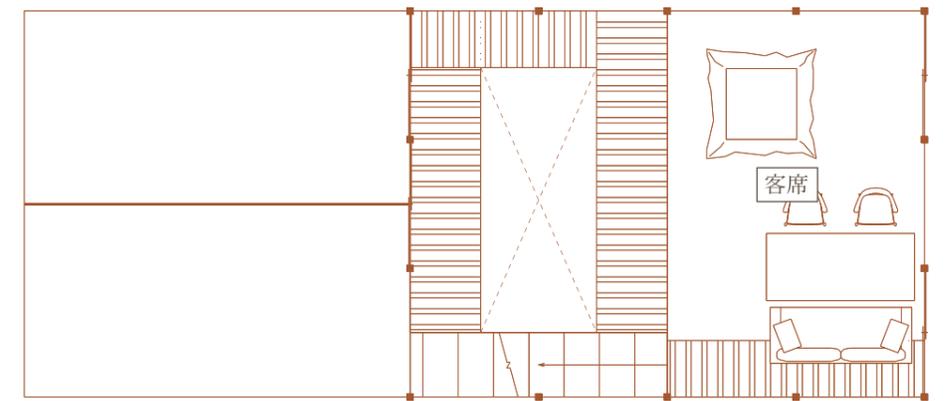


生産者は空き小屋を、閑散期にも収益が生まれる場所として活用する。観光客は観光の中で本場の味が本場で味わえるカフェとして利用する。

一階平面図



二階平面図



三階平面図



# 設計 せり出すみち

急斜面という緊張感がある敷地に様々な幅の床板をみちに設ける。

危険な作業を行う生産者がバランスを取るために足場として利用したり、一休みする際に道を利用する。

ここを通った観光客は目の前に集落全体が見渡せることに気づき、立ち止まって柿木に囲まれた集落を眺める。

